

ディスカッション

司会：それでは、討論を進めていきたいと思いません。ご自由にどこからでも結構ですので、ご意見・ご質問等をよろしくお願ひします。

藪田 貫（センター総括プロジェクトリーダー）：

最初に二つほど聞かせていただこうと思ひます。一つは、極端な話ですが、東北文化研究センターがほぼ独占している状態なのでしょうか。それから、センターとしての活動とオープン・リサーチ・センター整備事業としての活動との連携というのはどのように進めておられるのでしょうか。



藪田総括プロジェクトリーダー

菊地：山形大学という伝統的な国立大学がすぐそばにあるんですが、山形大学は最上キャンパスと名づけて、秋田に近い最上地域を拠点として、そこに学生をどんどん送り込んで、授業の一環として地域の方々といろいろな体験学習を行なっています。そこが一つの学習の場になっています。そして地域の皆さんと学生たちが一緒に民俗や歴史を学ぶという社会科学習的なものをやり始めておまして、それが3年目か4年目に入っているかと思ひます。独立行政法人になってからこれまでは、国立大学全体が非常に内向きの研究という傾向が強かったわけなんです。山形大学もかつてはそういう姿を示していたわけですが、最近になって非常に活発に動いておまして、私たちと連携している部分もあります。七日町という山形市の中心街に蔵が多く残されておりまして、私どもの学生と山形大学の学生が一緒になって「蔵プロジェクト」という取り組みをしています。これは東北文化研究センターではなくて、建築・デ

ザイン関係の学生と教員が合同チームを編成してやっているんです。そこで山形大学の学生も加わっております。最上のキャンパスと並行してそういうことをやっております。

また、すぐ近くに山形短期大学があります。ついこの間まで山形女子短期大学と名乗っていたんですが、男子学生を入れて山形短期大学となりました。この大学は西川町^{にしかわまち}という少し離れたところに拠点をもちまして、そこで学生が授業の一環として地域に学び、それを地域に還元し、一緒になって地域活性化のために取り組んでいます。

そのように、私どものすぐ近くにある2つの大学は、地域に開かれた大学であるためにはどうすべきかを考えていて、そして教員や学生も地域に行き、そこから学ぶべきものがとても大きいという自覚をされているようです。そういうことで、我が大学の一人勝ちではありません。ただ、私どもは1992年の開学当時から大学の方針として、地域に開かれた大学でなければならない、また地域から愛され、地域もこちらを愛するという関係の中で大学というのは成り立っていかなければならないという理念のもと、取り組みを始めていました。私どもはいろいろ新たな取り組みをしなければ、地域から目を背けられかねないと思ひます。



菊地 和博氏

それから2番目のご質問ですが、オープン・リサーチ・センター整備事業と普通のセンターの取り組みとがどう関わっているかという内容かと思ひます。

これは、関わっている部分と関わっていない部分があると言うと何か語弊があるような気がしますが、オープン・リサーチ・センター整備

事業で取り組んだものを研究成果として『季刊東北学』に盛り込む場合があります。したがって、研究報告書的な色彩を持った『東北学』になっている号もあります。それは中間報告的な成果が出たあたりか、あるいは最終的な成果が出たときに盛り込むか、時期や方法、タイミングがあると思いますが、そういう研究誌の発行の中で重なる部分があるかもしれません。

また、学内でシンポジウムや研究会、公開講座を行なっておりますが、地域の皆さんに大学が取り組んでいる研究成果を広く公開し、それをもとに意見交換を行なうといった、相互交流の場を普段から持っています。実は11月2日、3日に、オープン・リサーチ・センター整備事業の一環として、大学の中で「東北地方の^{かしら}頭信仰研究会」というものにも取り組む予定です。それから、8月4日に高校の先生方に広く参加を呼びかけまして、「高校生のための地域学ゼミナール」として「火の民俗と文化」をテーマに講座を開催しました。なぜ火にしたかということ、肘折というところが山伏の活躍した出羽三山の入り口の一つになっていまして、採灯護摩^{さいとうごま}や火渡りなど、よく火を使うということにちなんで、「火の民俗と文化」というテーマにしたんです。こんなふうにして、これはオープン・リサーチ・センター整備事業ではないんですが、絶えず高校生や一般市民が関わらして、講座や体験学習、シンポジウムを行なっています。

ただ、すべてがそういうふうにはできるものではありません。今、岸本さんが進めている酒田市に面した日本海に浮かぶ「飛島」^{とびしま}(山形県酒田市。山形県唯一の離島)というところの民俗調査では、学生を連れて行って調査研究をしておられますが、研究員がそれぞれの得意分野で学生や地域社会の方々と一緒になっているいろいろと取り組んでいます。繰り返しますが、オープン・リサーチ・センター整備事業と普段の東北文化研究センターの調査研究とできるだけ一致させながらやろうという心がけを持っています。

司会：他に何かございますでしょうか。R.A. (リサーチ・アシスタント)の方はいかがですか。

松永 友和 (リサーチ・アシスタント)：

リサーチ・アシスタントの松永^{まつながともかず}友和と申します。この2年間「なにわ」のセンターで勤務させていただいております。私は、センターの共通点と相違点について考えながら、お話をうかがっておりました。共通点としては、やはりオープン・リサーチ・センターということで、地域に根差した研究ということがいえると思います。それから相違点としては、デジタルアーカイブスが挙げられると思います。私たちのセンターでは少し立ち遅れている部分だと思います。

地域に根差しているという共通点があっても、厳密に突き詰めていくと相違点があるのかなとも思っております。東北学については不勉強で、恐縮ですが、足元にある地域の文化遺産を再認識することと、現実として地域が抱える問題に答えることとは、意味合いが少し異なると思います。先ほど岸本先生が最後に、地域が急激に変わっているというお話をされましたが、そのあたりをもう少し詳しく教えていただけますでしょうか。



松永 友和(R.A.)

岸本：お互いに共通点と相違点があるということで、その共通点であるところの地域という問題なのですが、私は大きく違うという印象を持ちました。こちらのセンターの取り組みは、持続可能な都市である大阪が歴史や文化を携えてどうなっていくのか、というところに向き合う研究なのではないかと思うんです。一方、私たちが向き合っている東北という地域は、都市ではありません。辺境であり村であるわけです。つまり、縮小社会の最前線で非常に加速度的に変化していく現場と向き合っていく研究です。私たちの場合は、研究で

ある一方で、運動のようなものと思っております。『季刊東北学』が全国の書店で買える状況になっていることは、大きな意味がありまして、「東北から日本あるいはアジアを見たときに何が言えるのか」ということを世に問うために、いろいろな人に見ていただけたと思います。『東北学』は第1期の事業で刊行されまして、現在の第2期では、『季刊東北学』を出版しております。また第1期には、『東北学』とは別に、『別冊東北学』というものを刊行していました。これは、論文のような学術的な文章ではなく、東北のさまざまな地域あるいは人々の生の歴史を紡いできたような雑誌でした。その後、『仙台学』をはじめ、それぞれの地域における有志の手によっていくつもの地域誌が生まれました。具体的には、『村山学』『会津学』『仙台学』『盛岡学』『津軽学』です。それぞれの地域で、自分たちの地域の歴史や将来のことを考えていくという運動が展開されています。現在、『仙台学』は6号まで刊行されています。また、これら地域誌は、地域に読まれる雑誌として大きく成長しています。なかには、増刷するようなものも出てきておりまして、研究者が研究した成果を地域に還元するだけでなく、地域の人たちが地域で学び、そしてその地域の将来を考えていくためのツールや媒体というものを広めていくという状況にあるのではないかと考えています。



岸本 誠司氏

司会：他にご質問はいかがでしょうか。

石本 倫子 (リサーチ・アシスタント)

リサーチ・アシスタントの石本倫子です。よろしくお願ひします。私はこの4月にセンターに

入ったばかりですので、東北学どころか、なにわ・大阪文化遺産学自体も勉強中なんですけれども、今お話を伺っていて、まず大阪・山形というそれぞれの地域が直面している現実が違うというお話をされて、おっしゃる通りだと思います。持続可能な地域と持続することを課題としてしている地域との差ということを感じました。そこで、大阪ではできないけれども、逆に東北という地域だからこそできるという点はありますでしょうか。また、東北文化研究センターの「東アジアのなかの日本文化に関する総合的な研究」という事業の中で、「詩的な場所」という表現がありますが、これはどういうことなのでしょうか。



石本 倫子 (R.A.)

菊地：いきなりこんなことを申し上げますが、小泉内閣以降、農業で地域間格差が目についてきたという実感があります。つまり、農業が産業として成り立たなくなってきたということなんです。私が先ほどから申し上げている民俗文化の中の伝承芸能・民俗芸能を維持してきたのは、農村であり農民であるわけです。ところが、現在はそんな踊りを踊っている場合ではないという地域がかなり多いんです。これは、非常に危機的な状況だと思います。東北だけではなく、例えば東根市は、サクランボがたくさんとれるところで、対外的にも「果樹王国」とアピールしているんですが、村山市・大石田・尾花沢と北に行けば行くほど雪が多くて、最上なんていうところは果物がほとんどとれないんです。畑作や稲作など頼れる作物がとても限られている土地が多くて、つくればつくるほど赤字が出るという状況が見られます。

そのような中、私が研究対象としている民俗芸能が地域から失われつつあります。それは、後継者が不足していることによると思われる。担い手であった農家の方々は農業ができなくて、サラリーマン化して、近くの工場で夜勤をしている方もいます。そうなってくると、練習する時間がなくなってきます。また、若者は携帯が通じないような山合いの集落にはいたくないというのが現実なんです。だから、若者の流出、少子化、そして農業の危機的な状況、これらが重なって大変な状況にあるというのが東北の偽らざる実態なんです。

ですから、私どもが「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」に焦点を絞った一つの理由は、そういうところにあるわけです。「東北文化研究センター」という名前である限りは、このような東北の実態を研究者としてきちんと受けとめて、我々は一体何ができるのかを見つめ直さないといけないわけです。

そういう実態を目の当たりにして、私自身民俗芸能の研究者として何ができるのかを考えながら、地域に行ってシンポジウムや基調講演においてお話しているのですが、それは簡単に言うと「励まし」なんです。ただ言葉で「頑張れ」と言うのではなくて、「こういうところではこんなやり方で何とか維持していますよ」という事例をお話しているわけです。



ディスカッションの様子

その事例の一つとして、限界集落を取り上げています。例えば、米沢市の山奥にある限界集落では、たった10人しかいない集落なのに、一度も途絶えずにシシ踊りが演じられているんです。どうしてそんなことが可能かという、山をおりて米沢という中心街に移り住んだ人たちが、応援に

駆けつけてくれるわけです。ふるさとの芸能ということで、「自分は山をおりて中心部に移り住んだけど、やっぱり忘れられない」という自分が育ったふるさとの文化に対して責任を持つ人たちが、市内のコミュニティセンターで練習をし、そして当日に集落の人たちと合同チームを組んで披露するんです。いろんなところに行って、「皆さんよりも厳しい状況に立たされながらも、地域の文化の灯を消さないように頑張っている人たちがいっぱいいるですよ」ということをお話しし、励ましてくるということの繰り返しです。これだけではなく、岸本さんが調査を行なっている飛島も本^{とびしま}当に今大変な状況にあります。普段は酒田市に家を持っているんですが、夏場だけ飛島に住みます。冬場などは、もう過ごせないようなところで。そんな感じですので、飛島の民俗文化や地域文化を維持するのは大変難しくなっているわけです。

とにかく私たちは、東北地方における環境・生業・技術という実態に立ち向かいながら研究し、そこで何が地域の皆さんのお役に立てるのかということに直面しています。ですから、そういう暮らしの実態から考えれば、相違点が出てくるというのは当然だと考えています。どちらが良いとか悪いとかでは決してなくて、それぞれの地域性が非常によく出ていておもしろいと思います。

司会：「詩的な場所」という質問については、いかがでしょうか。

岸本：女性だからなのか、やはりこういうところをしっかりと見ていただいているなと思います。おもしろいタイトルなんですけど、私もこれを最初に見たときは「何だろう」と思いました。これ自体は、当時私たちと同じ研究員だった飯田^{いいだきょうこ}恭子さんという方が、ドイツに留学されたときの指導教授であるゲトレフ・イブセン（カッセル大学教授）という方が取り組んでいる考え方を日本に導入して研究につなげたものだったんです。

わかりやすく言いますと、空間や場所というものの意味を現代的な視点、あるいはより感性的な部分を広げたところでとらえたものです。これについて私も一緒に研究会を持った時期もあったん

ですが、やはり最初はなじまなくて、どこを詩的に思うかなんて人それぞれで違うだろうと思っていました。それはもちろん違うんですけども、そのなかで私なりにこういうことだろうと思ったんです。例えば、かつての村のような社会を想定した場合、そこに住んでいる人たちというのは、ほとんどが生活共同体のような人たちですから、同じような意味をもつ「場所」を共有できたわけです。例えば、ここは行ってはいけない場所、あそこは神聖な場所、そしてそれが時間によって変わるというのは承知していたわけなんです。これが現代社会の場合、歴史的な経験を共有しない人々が共存するような社会になってきます。そうなった場合に、かつては固定的に思われていた場所というものが変わってくるし、意味も変わってくるわけです。そうした他者的・内在的な場所というのを考えた場合に、アートや歴史といったものをうまく組み合わせれば、多様な価値観や人生を持つ人たちが共有できる場として機能していくのではないかというような研究会でした。やはり大阪も都市ですから、非常に歴史が重いとされる場所があっても、ある人はすごいと思い、ある人は全然興味がなかったりするわけです。多様な価値観を持つ人が、ある場所を共有の場所として大事に思うようになるのか、ということは考えてみると非常に面白いのではないかと思います。

司会：ありがとうございました。それでは、これにて本日の文化遺産学交流会「東北学となにわ・大阪文化遺産学」を終了させていただきます。菊地先生、岸本先生、どうもありがとうございました。